

R-18  
FOR  
ADULT



ちんぽをしゃぶる巨乳

〜JAVSTATION〜



みんなおもちゃにしてあげるっ！

## 目次

【ガラスの中の大雨】	4
【罪深き音色】	6
【にぎやかな街で朝食を】	8
【無邪気な一投】	10
【真夏の大地を駆け抜けて】	12
【大怪獣妹ちゃん(仮)】	15

## ガラスの中の大雨

かわいいグッズに囲まれた、かわいい女の子の部屋。その片隅に置かれた空の水槽の中に人がいるなど、誰が想像できようか。

ガラスの壁に囲まれ、閉じ込められたのは一人の青年。彼は学校からの帰り道、何者か後ろから襲われ、突如として縮小されてしまったのだ。

幸運にもすぐ後からやってきた妹に見つけられ、無事家に帰ることはできた。だが、とりあえず危険だからという理由で、妹によって空いていた小さな水槽に入れられてしまったのだ。

「お兄ちゃん、じつとしてね？」

妹はその一言だけを残し、パソコンの前に座り、猫耳娘の柄が入ったヘッドホンを被る。そしてキンキンに冷えた炭酸飲料を片手に、動画サイトを漁る。

MAD動画を数本視聴する間に妹はペットボトル一本を空けた。そしてけだるげに立ち上がると、部屋を一度出て、今度は違うラベルの付いたペットボトルを手に戻ってくる。

鼻歌を歌いながらボトルの蓋を開けると、今度はなにやら怪しいゲームを、食い入るように画面を見つめる。ディスプレイに釘付けになった妹は、もはや兄のことなど忘れているのかのようだった。

「あいつめ……元に戻ったら説教か」

兄が暇を持て余していると、集中していた妹が突然ヘッドホンを外して立ち上がる。

「と、トイレ行きたくなっちゃった……どうしよう」

半ばもうたえる妹は時計に目を向ける。今日は近くで工事をしている関係で、午後四時までは断水。あと三十分は、トイレが使えない。

「外も……行きたくないなあ」

妹はわずかなカーテンの隙間から外を覗く。曇天から降りそそぐ雨が、激しく窓に打ち付けられている。こうなると、近くのコンビニまで歩いていくのもなかなか大変だ。

妹はベッドの上に倒れこみ、スカートの上から両手で股間を抑えつけて尿意を必死にこらえる。顔がどんどん赤みを増していき、まるで発情しているかのように息が荒くなっていく。

「もうだめっ！」

錯乱した妹は部屋の中を見回す。ペットボトルはまだ中身が残っており、さすがにそれを使う気にはなれない。

すがにそれを使う気にはなれない。

「あ、ちようどいいものが！」

妹はその場で突然パンツをずり下げ、兄が入ったままの水槽に跨った。

「お、おい、やめろ！」

兄の叫びも空しく、しつとりと濡れた割れ目から薄黄色の滝が流れ落ちる。水の東は水槽の底で弾けて激流となり、猛烈な勢いで兄に襲い掛かる。

どんどん迫ってくる妹のおしっこ。兄は何とか壁を這い上ろうとするも、ガラスが滑ってうまく手がかからない。足に届くとあつという間に水位が上がり、かかと、足首、ひざ、下半身があつという間におしっこに飲み込まれていく。

「ふう……」

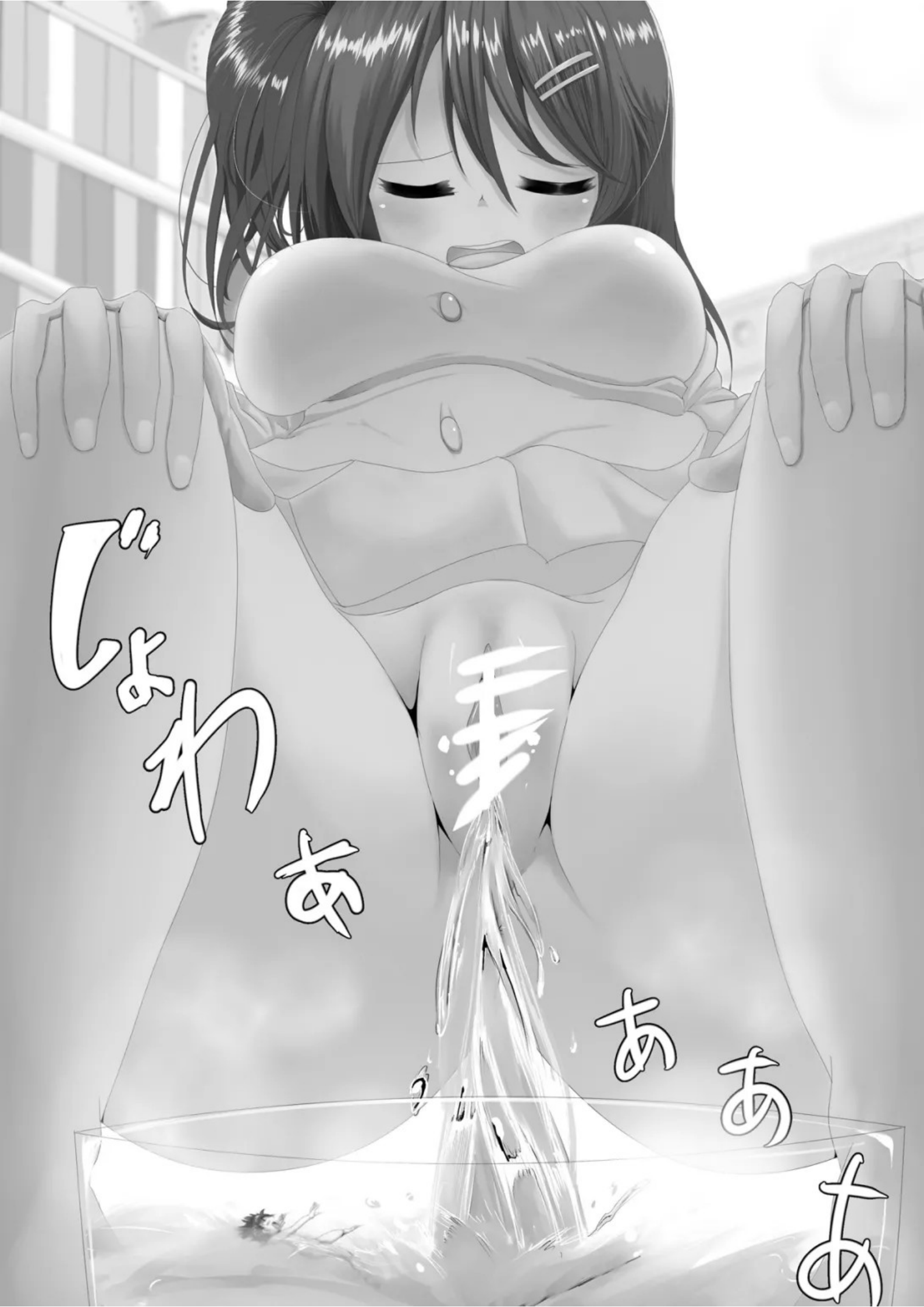
ようやく落ち着いた妹は軽くティッシュに手を伸ばし、股間に付いた水滴を丁寧にふき取った。濡れたティッシュを何重にもくるんでゴミ箱に捨てる。水槽をまじまじと覗き込む。

「ふああ……けっこうたまつた。これ、ちゃんと後で洗わないと……」

あれ？」

黄色い水面に浮かぶ、小さな黒い点。小さくされた兄が、苦しげに顔だけを出して、おしっこの海の中で溺れかけていた。

「あ、お兄ちゃん！忘れてた……」



じょわ

あ

垂

あ

あ

あ

## 罪深き音色

男が目が覚めすと、そこは広いフローリングの上だった。だがそれは普通の状況ではない。身ぐるみをはがされ、あらゆる姿にされていたのだ。

周りを見回せば壁に張られた半紙、ランドセルの仕舞われたロッカー。その景色は、先程まで彼が潜り込んでいた教室だ。

だが男が意識を失っている間に、そこはただの教室ではなくなっていた。天井ははるか遠く、黒板も、ペランダの鉢植えも、そして今男が乗っている机も、何もかもが大きい。そして窓の外から見える遠くの街並みもまた、男の目には同じように大きく映っていた。そう、教室が変わってしまったのではない。男が小さくされてしまったのだ。

静寂を破って、教室のドアが開く。男は慌てて隠れる場所を探すも、何一つ物のない机の上には、物陰など存在しない。

崖の向こうから、巨大な顔が近づいてくる。  
「めがさめたの？みんなが帰ってくる前に、じゅんびしなきや」

汗だくになり帰ってきた少女は机の上にリコーダーを置くと、大きな指で慎重に男を掴み上げた。もう片方の手、その人差し指の先には、光を反射し虹色に輝きながら揺れる透明な布。

その正体は、すぐにわかった。

「じつとしてね？」

少女は男をリコーダーの吹き口のすぐ近くに寝かせると、胸の上から布をかぶせる。男は振りほどこうとするも、ねばねばした布に抑えつけられて身動きが取れない。

「セロテープでくっついちゃった♪これでだいじょうぶかな？」

少女はリコーダーを手にとると、顔の前まで持ち上げる。失神寸前の加速度に耐えた男の瞳に映るのは、まるで雲の上から覗いたように遠く離れた床。せいぜいメートルの高さが、限りなく遠いものに見える。

「もうちょっとだけ、がまんしてね？」

そうして男は、リコーダーと共に真つ暗な世界に閉じ込められる。閉ざされた世界に再び光が差しこんだときには、彼は遙か別の場所へと連れていかれていた。

「ちゃんといきてる……♪」

少女は男の無事を確認すると、慎重にリコーダーを取り出して机の上に置いた。

上半身が動かせない男は首だけで景色を確かめる。壁に張られているのは、著名な

音楽家の写真。黒板には五線譜が張られている。それはありふれた音楽室の内装。そして周りには、同じように机に置かれたいくつものリコーダー。その状況が、これからここで始まることを男に教えていた。

「おとこの人って、どんなあじがするのかな？」  
その一言に、男は自分の悪い予感的中したことを悟る。だが、もう何もかもが手遅れだ。

少女は男を吹き口に張り付けたままのリコーダーを、躊躇なく啞えた。口が閉ざされ、真つ暗で蒸し暑い世界の中、男はただ恐怖に耐える。

彼女がすう、と息を吸った、次の瞬間。

鼓膜が破れるほど大きな音とともに、生暖かくべとりと濡れた、弾力のあるなにかが無防備な体に押し付けられた。頭が、腹が、足が、そして貧相な股間が、彼女の舌によって激しく擦られ、ねっとりとした唾液を塗りつけられる。

リコーダーのうるさい音など、もはや気にしている場合ではない。少女が一音一音を吹くたび、舌先が激しく男の体を舐め、生暖かい息が全身に吹き付けられるのだ。それらが男の敏感な体を刺激して、性的興奮を高めていく。

「うっ……」

男が小さく声を漏らすと同時に、男性器の先端から白くねっとりした液体が噴き出す。それは男の理性と意思に逆らい、彼に極上の快楽を与える。

いつってしまったのだ。それも女の子の口の中で。

字面だけなら、憧れる人もいる状況なのかもしれない。しかし、今の男は、小さくされて閉じ込められ、年端もいかなない少女のおやつとして舌で弄ばれているに過ぎないのだ。

「にがーっ」

精液の味に耐えかねたのか、ようやく少女が口からリコーダーを放す。男は全身で新鮮な空気を味わう。だが、それも長くは続かなかった。

「では、もう一度演奏してみましよう！」

再び、地獄の始まりを告げるピアノの伴奏。

「ふふっ、もっともつとあじわってあげる……」

少女が嗜虐的な笑みを浮かべたかと思うと、男は再び生暖かい洞窟の中へと運ばれる。逆らう気力も人間としての尊厳も失くし、男はただ舐めまわされるの存在へと成り下がっていった。



## 賑やかな街で朝食を

静かな駅前遊歩道。小鳥がさえずり、時々通るバスと電車の音だけが聞こえる、いつもと変わらない朝。

見慣れた人々が行きかう道に、突然悲鳴がこだまする。振り返ると、駅の向こうの側、高層ビルの隙間から巨大な少女が顔をのぞかせていた。

「ふふっ、ご飯がいっぱい」

彼女はよだれを袖で拭くと、その巨大な手でビルを押しつける。コンクリートの塊は驚くほど容易く倒れ、轟音とともに煙が空高く上っていく。私の周囲で呆然としていた人々も、彼女に背を向け一斉に逃げ始めた。

巨大な少女は不敵な笑みを浮かべると、大地を揺らしながら這うようにして駅へと近づく。

「ごっはんー、ごっはんー♪」

気分よさげに鼻歌を鳴らして、少女は進む。鳴り響く不気味なサイレンを背に、その一挙一動で数百数千人を押しつぶし、ビルの崩壊に巻き込みながら。

やがて駅にたどり着いたその影は、遠目で見るとよりはるかに大きかった。

「おいしそう……」

巨大な少女はその手を伸ばし、山をも掴めそうな手で止まっていた電車を鷲掴みにすると、そのまま空高く持ち上げた。

彼女の手から、人を乗せた鉄の鎖がぶら下がる。やがて連結器は限界を超えて切れ、いくつかの車両が重苦しい音を立てて地面を転がる。通勤客がすし詰りになっていた窓の内側は、血でべっとり濡れていた。

だが彼らは、まだいいほうだったのかもしれない。

少女は手の中の車両に舌を這わせると、唇で挟んで軽く歯を立てた。

「ひははきまーす」

行儀がいいのか悪いのか。巨大な八重歯が、鋼鉄の車両を無慈悲にかみちぎる。金属のはち切れる音に聞こえて、何かが砕ける、つぶれるような嫌な音が聞こえた。

彼女の口元には、鮮やかな赤い水たまりができていた。それは、肉をむさぼる獣を彷彿とさせるようで、かわいらしい顔にはあまりにも似合わないかった。

彼女は何度も鈍い音を立てながら咀嚼すると、残る半分も口の中へ入れ、そしてごくりと飲み込んだ。その喉を鳴らす低い音だけが、人のいなくなつた駅前に響く。

「おいしい……おかわり」

あまりの恐怖に、見ていた私はその場に崩れ落ちてしまった。自分がつい先まで乗っていた電車が彼女の喉の奥へと消えていったという事実が、この小さな体をただただ震わせていた。

彼女は赤く染まった口元を袖でぬぐうと、地面に落ちた次の一両へと手を伸ばす。これがまだ恐怖の始まりにしか過ぎないなど、知る由もない私の前で。



## 無邪気な一投

都会の片隅、天へと延びる高層マンション。そのとある部屋で、一人の青年が布団の中でヘッドホンをつけ、無気力に天井を眺めていた。

「死ぬほど暇だし、ポウリングにでも行きてーな」

布団をかぶり直した青年は、枕に向かつてぼそりと呟く。その隣で、携帯が何度も不気味なチャイムを鳴らしていることに気付かず。

「誰かポウリングにでも連れてつてくれねーかな」

「ポウリングしようよ！」

知らない声で聞こえた返事に、青年は驚き飛び上がる。しかし部屋を何度見まわしても誰もいない。消えたままのテレビが、うつすらと彼の顔を映すだけだ。

「いいね、ポウリング！私も久しぶりだなあ」

薄暗い部屋に響く、先ほどと違う声。どうやらそれは、窓の外から聞こえているようだった。しかしここは地上五十階、空の上。とても街を歩く人々の声が聞こえるはずもない。

青年は目をこすりながら、カーテンを開ける。この街を見下ろせる部屋から見る景色は、いつもと一変していた。

足元に伸びる、いつもは浮かれた人々で埋もれる大通り。そこは、見たことのない様相を呈していた。割れた窓ガラス、切れた電線。消防車や救急車が横倒しになり、パトカーが無残に潰れている。周りの街からも炎と煙が上がり、混乱した群衆が街を埋め尽くしていた。

そして何より、交差点の真ん中で、ガスタンクをボールのように抱えて立つ、高層ビルほどに巨大な二人の少女。恐怖の渦巻くこの街で、彼女たちだけが楽しそうに笑っていた。

青年は非現実的な光景にしばらく呆然としていたが、我を取り戻してテレビをつけた。目の前を横切っていた報道ヘリに積まれたであろうカメラが、彼女たちの残酷な笑顔を捉えて世界中へと届ける。

そして全人類の目の前で、それは始まった。

巨大な影の片方が、ボールを胸の前で構え、体の後方へとおおきく振りかぶる。

鋭い視線の遙か先の駅前広場には、丁寧なひとつずつ三角形に立てられた電車。

まだ人々が逃げ惑う大通りをレーンにして、狙うは、最高の一投。

「ストライク狙っちゃえー！」

友人の声援を背に、少女は渾身の力でガスタンクを転がした。

歓声の代わりに響き渡るのは、悲鳴。緑の鉄球は、青年の眼下を猛然と転がっていく。

通りをかるうじで抜けられるほどのボールは、信号機をなぎ倒し、止まっていたバスや車を巻き込み、赤い軌跡を残しながら、戦車すらもたやすく乗り越えて、人を乗せたままのピンに向かつて一直線に転がっていく。やがて殺戮兵器と化した鉄球は、勢いを保ったまま十本、いや十両すべてを弾き飛ばした。大きく変形した電車は宙を舞い、鈍い音を立てて、ビルに叩きつけられ、あるいは地面に落ちて付近にいた人間を巻き添えにしていく。そしてガスタンクは駅ビルにめり込み、少し変形しながらようやく止まった。

「やったね、ストライクー！」

煙くすぶる交差点で、少女たちはハイタッチを交わす。その様子を見る数十億人が、底知れぬ恐怖に襲われているとも知らずに。



## 真夏の大地を駆け抜けて

眩しい太陽ときらめく水面。弓のように美しい弧を描く砂浜。透き通る空はどこまでも青く、世界の果てまで続くように見える。

今年も、この季節がやってきた。

都会から離れたこの浜辺にも、海に誘われた人々が集う。

浮き輪を使ってぎこちなく泳ぐ子供と、それを日傘に隠れて見守る大人。互いの距離を探りつつ控えめに泳ぐカップルもいれば、それを脇目に冷たい水をかけあいしやぐ初々しい高校生の姿も映る。若者たちは海などそっちのけでバレーキューに興じ、その近くでは学生たちがふざけ半分に砂に身を埋めあう。

そんな彼らを覆っていた青空が、突然大きく歪む。

「なんだあれ」

「え、怖くない……？」

見たこともない現象に人々は戸惑い、賑やかだった砂浜は騒然とする。呆気にとられる彼らの前に現れたのは、島と見間違えるほど巨大な鋼鉄の船だった。

興味を示して近寄ろうとする子供を連れ、大人たちは水着のまま車に乗り込み逃げ出す。しかし若者たちは危機感より好奇心が上回ったのか、カメラを向け、果てにはSNSに投稿し始める。

浜辺に残った人々の見守る中、船のハッチが開く。淡く輝く銀の船から降りてきたのは、これまた巨大な水着姿の少女二人だった。

「すごい、綺麗な海ね。わざわざ来たかいがあったわ」

そう言っただけで瞳を輝かせるのは、犬の耳のついた少女。

「ほらほら、言った通りだにゃん」

無邪気に答える少女の耳は、猫のそれにそっくり。

二人の少女は無邪気に水をかけあってはしゃぐ。大型船を木の葉のようにゆすり、転覆させていく。そしてその大波は浜辺に届き、逃げ損ねた者たちも、逃げ出していた車列もまとめて押し流す。

一通り体を濡らした二人は、海から上がり、人間たちの住む街に上陸した。

巨大な足の裏は数十もの建物を踏み潰し、交通網や電柱を破壊して都市の機能を麻痺させる。

「ちよつとぐしゃって感じだし、おもしろい砂浜だにゃん」

「結構遠くまで続いているし、何かしら……。普通の砂じゃないわね」

地球の建物はあまりにも脆く、彼女たちにとっては土のようだ。二人の足の幅ほどしかない本物の砂浜に気づかないのも、無理はなかった。

「あんなところに、何か生えているにゃん」

猫耳の少女が指差す先には、この島国で一番高い電波塔。彼女たちにとつては、それは白く小さな木のようなものに見えた。

「何かしら、見たことのない植物ね」

そう言っただけで近寄ろうとする犬耳少女を、鋭い爪の生えた手が制止する。

「せつかくだし、どっちが先にたどり着けるか勝負するっていうのはどうにや？」

「久々だし、ひとつ走りするのもいいわね」

犬耳は腕を伸ばし、軽く背伸びをする。

「キミの好きなタイミングで初めていいにゃん」

「それじゃ……。よいい、ドン！」

大気を震わせ雲を吹き飛ばす声を合図に、二人は駆け出す。

その一歩は数十棟の建物を踏み潰して瓦礫を宙にばらまき、風を切る体は衝撃波を生み出して小さな建物を吹き飛ばしていく。飛行場を飛び立ったばかりの戦闘機をお腹で粉砕し、高層ビル群を軽く飛び越え、いくつもの街を瞬く間に駆け抜けて、二人はほぼ同時に展望台に飛びついた。

手を伸ばして大地を滑る、二つの巨体。その大きな胸は建物をすり潰し、着地点にできたクレータは体に引きずられるように伸びていく。激しい揺れは瞬く間に広がり、遙か遠くの街を瓦礫の海へと変えていった。

轟音がようやくやんで時、展望台をその手に握りしめていたのは、

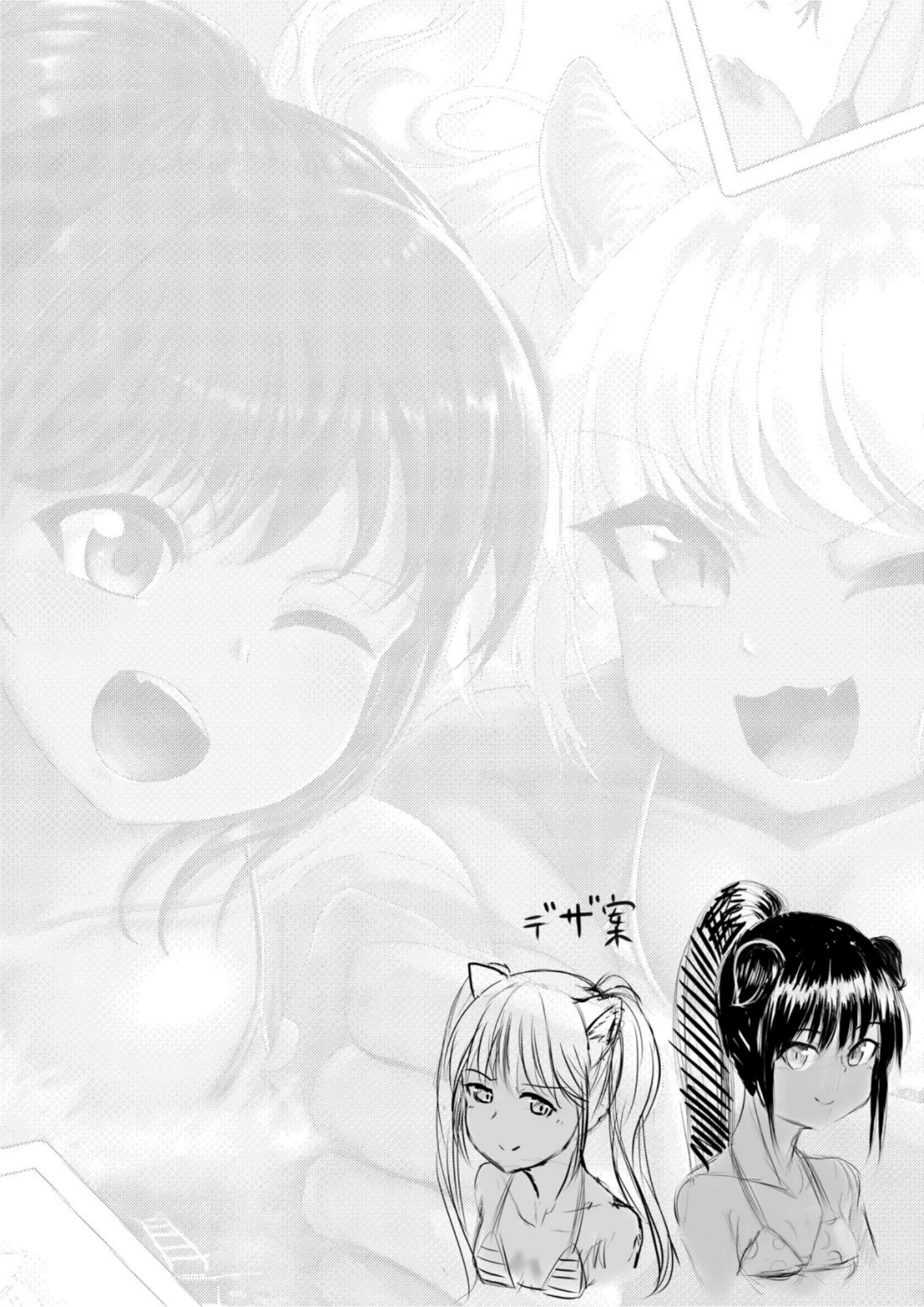
猫耳の少女だった。

「やったにゃん！」

「すごいわ、私も頑張らないと」

土まみれのまま立ち上がり、展望台を片手に談笑する二人の少女。彼女たちの通ってきた跡には、足の形に深くえぐられた地面と、竜巻に襲われたように深い傷跡が残されていた。





デザ案



## 大怪獣妹ちゃん(仮)

僕と妹は、少し複雑な関係だ。

静かなりビングで、僕は真剣に野球中継を眺める。その隣に座る妹は、何も喋らない。でもソファに座る僕にびたりと寄り添って、片時も離れない。いつもこんな感じで、静寂の中、二人だけの時間を過ごす。

そんな僕たち二人は、血が繋がっているわけではない。お互い複雑な家庭で育ち、その結果として兄と妹になった。

それでも今となつては、これが僕たちにとつての日常。二人だけの時間が、何よりも尊いもの、かけがえないものになって久しい。

そんな何の変哲もない日曜日の朝。僕は友人に勧められた映画を見ることにした。

昔から有名で、最近リメイクされた怪獣映画だ。特撮にはあまり興味がなかったが、ゲームクリエイターを目指すなら参考にしろと言われ、しぶしぶ借りることにした。

正直、妹に合うのかどうか。むしろ少しばかり暴力的なシーンがあるゆえ、あまり見せたいとも思わない。だが妹は、僕の袖をつかんで離さなかった。

「怖かったら、ちゃんと言うんだぞ。いいな」  
妹はコクリと頷く。

最初は急な音量の変化に驚いていたが、映画が進み、怪獣が本格的に暴れるにつれて、妹の目の色が変わっていく。

それは恐怖の類ではない。興味でもない。もっと複雑で、もっと見えないところにあるもの。

彼女が何を思っているのか分からないまま、だが尋ねることもできないまま、ただ目の前で繰り広げられる破壊劇をぼんやりと眺める。映画のエンディングが流れ始めたところで、妹は突然口を開いた。

「私、怪獣さんになつてみたい」

翌日、講義を終えた僕が向かう先は、キャンパスの片隅にある部室棟。その最上階の、一番階段から遠い部屋の扉を軽くノックする。

「どうぞ」

ヘッドホンを外して振り向いたのは、学科の同期であり、僕が唯一話せる女子だ。彼女も複雑な家庭環境で育ち、人とうまく付き合えない時期が続いていたが、進学を機に自立し、克服したらしい。

そんな彼女に、僕は妹の言動をありのままに話した。

「怪獣になりたい、ね。やつぱり、相当ストレスがあるのかもしれないし、言葉にできないものを抱えているのかも。うまく発散させてあげれば、もしかしたら変わるかもしれない」

「でもさ、なかなか難しいよなあ。特撮ごっこをするわけにもいかないし」  
「できるわ」

「は？」

「だって、私たちVR研でしょ？」

映画にありそうな決め台詞を枕詞に、彼女は僕にアイデアを話した。なるほどたしかにそれは部の機材と技術で実現可能ではあったが、なかなか遠い道のりに思えた。

それでも妹のためなら、彼女が心を開ききっかけになればと思うと、この提案を無下にするわけにもいかない。

「是非ともやらせてくれ」

「そうね。できれば今日からでも始めたいけど、妹ちゃんのこともあるし、あまり遅くなると良くないんじゃない？テレワークでやりましょ」

「そうだな」

最低限の準備を終え、地平線に沈む太陽と競争をしつつ家に帰ると、妹は何かを探して、せわしなく部屋の中を動き回っていた。そして僕を見つめるや否や、物欲しそうな顔でくっついてくる。

「もう一回、見せて」

それがなんなのか、僕にはすぐにわかった。だけど同時に、妹のことを少し愛らしく思う。

彼女が求めるブルーレイは見つかるわけもない。なぜならそれは、友人に返し損ねたまま僕の鞆の中にあるからだ。

妹は僕がまだ持っていることを確信しているらしく、無言のままお腹に張り付いて急かす。僕は仕方なく鞆を開け、ディスクをデッキに入れた。

昨日見たばかりのロゴ、そしてオープニング。妹は食い入るように画面を見る。橋を食いちぎり、高層ビルをなぎ倒し、圧倒的な力で軍隊をねじ伏せる怪獣。平和な街を瞬く間に炎の海へと変え、そびえ立つ文明の標を焼け野原へと返していく。そして何より象徴的なのが、ライバル怪獣を倒した後、その亡骸を踏みつけ首都の真ん中で天に向かって吠える場面。

人類が作り上げた理など無意味。我こそが新しき支配者だと、絶対的な力の象徴だと言いたいのか。そうした自信に満ち溢れた姿は、空想の産物でありながらも見るものに恐怖を抱かせる。

だけど。その姿の何が妹をそこまで惹きつけるのか、僕にはまだよくわからない。何か彼女の奥深くにある、僕には知りえないものが、彼女を動かしているのだろうか。

怪獣映画のブルーレイは、本格的に参考にしたいと言ってしばらく借りておくことにした。ついでに続編も何本か借りて、シリーズを通して妹に見せた。妹は飽きることなく、僕の袖を固く握ったまま、食い入るように画面を見る。

僕はそんな妹の隣で、ノートPCを開いて作業を進める。辛い妹は映画に気を引かれていて、僕たちの計画は完成まで秘密にできそうだ。

果たして一ヶ月を費やし、僕たちの世界は完成した。

予想以上にデータ量が増えた関係で出費を余儀なくされたのは痛かったが何より単位を犠牲にせずに済んだのは奇跡としか言いようがない。

そして、運命の日。たまたま休講になった空き時間を利用して、妹を家から連れ出すことになった。

妹は家から大学までの間ずっと僕の手をぎゅつと握り、背中に隠れていた。

今回僕たちが作ったものを妹に一通り説明する。怪獣になれるという体験に興味津々の様子だったが、視界を覆うヘッドセットを被ることだけがどうも不安なようだった。

「大丈夫、僕もいつも被ってるから」

妹はおそろおそろヘッドセットをかぶる。そしてシールドを閉じ、ソファアの上で横になる。妹に手を握られた僕も覚悟を決め、ヘッドセットのスイッチを入れた。

「妹さん、無事に入れたみたい。状態安定もしてるわ」

「おっけー。じゃ、俺も行くわ」

僕も一回り大きいヘッドセットをかぶり、この世界に住む名もなき一般人として大地に立つ。願いを叶え、大怪獣になった妹の様子を、その姿を、この目で確かめるためだ。

僕が出現したのは、駅前スクランブル交差点。道行く人々の姿もあまりリアルで、ここが仮想世界であることを忘れてしまいたい。

人々が何かを指差す先に、それはいた。

太陽を背にそびえ立つ、巨大な影。それははつきりと人の形をしていて、少し色素の薄い長髪が風で揺れる。

その姿を見間違えるはずもない。妹は普段の姿そのまま、この街に現れていた。彼女の望んだ、巨大な怪獣として。

妹は周囲を一瞥すると、無言のまま駅ビルに向かって拳を突き出す。非力なはずの妹の拳はたやすく壁を突き破り、轟音とともに反対側から顔をのぞかせた。瓦礫やビルの内装、デスクや人間までもが弾き出され、鈍い音を立てて駅前広場に降り注ぐ。

呆然とその様子を見上げていた人々は、一呼吸置いて一斉に悲鳴を上げ、そして我先にと逃げ出す。しかし人で埋め尽くされた中ではうまく身動きも取れず、押しあい、ぶつかり合って、混乱の渦は瞬く間に広がる。大人も子供も関係なくなり、構わず逃げるその姿は、まるで映画のワンシーン、あるいはそれ以上のありさまだ。

「すごい、本当に怪獣さんになっちゃった」

妹は感触を確かめるように、ゆっくりと腕を抜く。辛うじてその形を保っていた駅ビルもゆっくりと崩れ落ち、周囲に粉塵の雲を広げていった。

逃げずにその様子を観察していた僕の視界は瞬く間に奪われる。その中に響く、悲鳴とサイレン、クラクション。その中に突然割って入った地響き。

すぐ横に、巨大な影が現れていた。よく目を凝らしてみると、それは妹の足だった。

呆気に取られて立っていると、一人の男が肩をぶつけてきた。方向を見失って戻ってきてしまったのだろうか。彼が走り抜けて行った先に、また巨大な影が落ちた。地響きに紛れて鈍い音が聞こえたのは、きつと気のせいではないだろう。

シミュレーションとはいえこれも不思議な状況で興味深い、肝心の妹の



様子がわからない。仕方なくランダムワープを試みることにした。

移動した先は、ほんの少し離れた高架線路で止まった電車の上。妹は駅のホームを引きはがし、電車に手をかけていた。

「みんな、おもちゃにしてあげる」

その青い瞳で電車の中を一瞥すると、雑巾を絞るように捻り潰す。僕にとつて握り慣れたはずの手から、とめどなく誰かの血が滴り、落ちた雫が小さな湖を作る。そして十数両あった電車を全滅させると、最後の二両を地面に叩きつけ、足で執拗にすり潰した。それを見た人々は怯え、逃げ惑う。理性など忘れて、ただ生き延びるためだけに。

怪物になりたいという夢を叶えた彼女は今、映画に描かれていたような恐怖の象徴となった。

彼女はこれからどんな破壊のシナリオを作り上げていくのだろうか。その瞳の、心の奥には、いったい何が眠っていて、僕は何を目覚めさせてしまったのだろうか。

僕は、この目ですべてを見届けなければいけない。

彼女の一番そばで生きていた人間として。そしてこの閉ざされた世界で、ただ一人「生きている」人間として。

あとがき

りけいじん

みなさん、はじめまして。今回文章を担当しましたりけいじんと申します。まずはこの本を手にとっていただき、ありがとうございます。私たちの作品、お楽しみいただけたでしょうか。ほんの少しでも楽しんでいただけたなら、幸いです。

さてここからは、個人的な感想を。

まずはじめに、人生初の同人誌が夏コミのサークル主としての参加になるとは思いもせませんでした。

(こうして即売会デビューすることになったのも、紆余曲折あつてのことなのですが……)(笑)

もともとpixivなどで小説を投稿していたのですが、いつか同人誌に寄稿してみたいな、と思いながら日々を過ごしていました。

そんな時、灯さんにこの企画を持ち掛けていただきました。

最初はDLで出そうという話でゆっくり進めていきましたが、たくさんの同人イベント(去年だけで十回!)に足を運ぶうち、

オタクとして生きていくうえで、一度だけでもこっち側の世界に立ってみたい、自分も作品で誰かの心を動かしてみたい、と考えるようになりました。

そこでこの夏に照準を合わせ、灯さんに何とか調整していただき、この本を出すことを決めました。

自分の書いた文章に灯さんがイラストを描き、時には二人で悩んで、一つの作品として命を吹き込む。

すべてが自分にとつては新鮮で、かけがえのない経験でした。

もちろん始める前には想像もつかない苦労に直面したりもしました。

特に灯さんにとつては、短編一本に対して一枚絵を描いていただくというのはとつもないチャレンジだったと思います。

提案されたときはあまり実感が湧かなかったのですが、実際に夜遅くまで灯さんの作業を見させていただいて、

絵を描くことの大変さ、そしてたくさんのコンテンツに触れられることが

どれだけ幸せなことであるかを感じさせられました。

今となっては、こうして一冊の本として無事に送り出せることにほっとしていると同時に、灯さんと一緒にやれたことを誇りに思います。

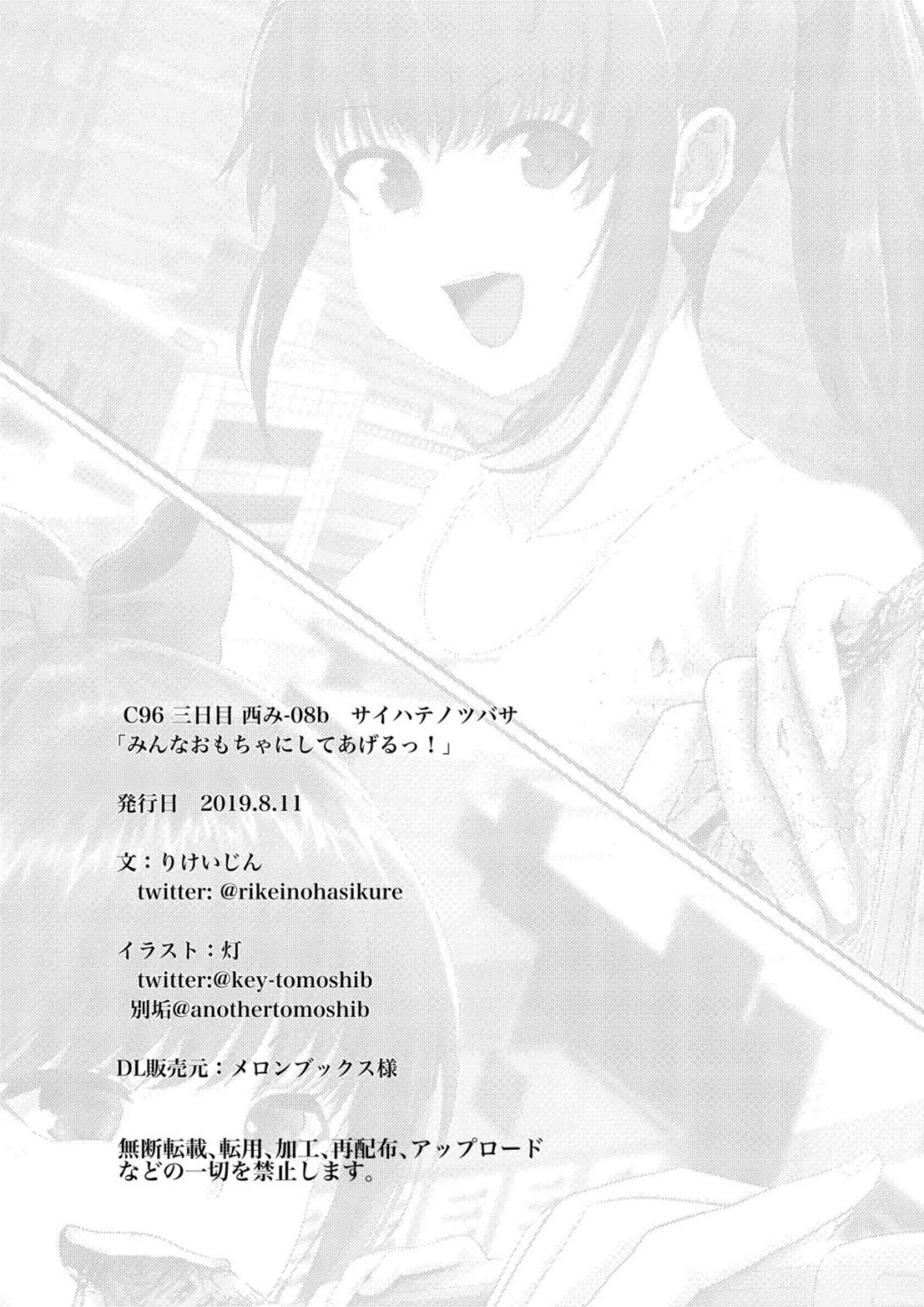
この一度きりと決めて臨んだ夏。きつと、一生の思い出になりそうです。

最後になりましたが、私の文章を読んでくださったすべての方に、そして今回の企画を最後まで一緒にやり遂げてくださった灯さんに、最大限の感謝を。

灯

りけいじんさんの文章について絵をつけれたやつたー!

本当にお疲れ様でした、僕の我が儘に付き合っただけで有り難うございました!



C96 三日目 西み-08b サイハテノツバサ  
「みんなおもちゃにしてあげるっ！」

発行日 2019.8.11

文：りけいじん  
twitter: @rikeinohasikure

イラスト：灯  
twitter:@key-tomoshib  
別垢@anothertomoshib

DL販売元：メロンブックス様

無断転載、転用、加工、再配布、アップロード  
などの一切を禁止します。





サイハテノツバサ

comic market 96